柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話：070-1503-6401/044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 188 号

新年、あけましておめでとうございます
本年もよろしくお願い申しあげます

柿生郷土史料館館長　柿生中学校校長　石井秀明

今年は干支でいえば、「甲辰」(きのえたつ)です。過去の辰年を振り返ってみると、努力した成果が実を結ぶような出来事が多く起こっています。「成功という芽が成長していき、姿を整えていく」という傾向の表れかもしれません。

さて、新型コロナウィルス感染症の対応が５月より「２類相当」から季節性インフルエンザと同じ扱いとなる「５類」へ移行されました。

それに伴い、社会情勢や教育環境を取り巻く状況は大きく変化しました。社会や経済におけるグローバル化や AI など情報化が大きく進展して、多様性や利便性など、私たちのライフスタイルにも大きな変化をもたらしています。

これから予測できない変化に対して、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を発揮して未来社会を創り出す「生きる力」としての資質・能力を育むことが求められています。

そこで、温故知新というとおり、100 年前にあった出来事を調べてみると、

「柿生村の養蚕戸数 480 戸、46,000kg の生産」、「王禅寺村、黒川村に電灯がつく」と記載されていました。その中でも、大きなできごとは「川崎市誕生」です。関東大震災で工場が倒壊し、都市基盤の整備が不可欠となったため、特に上水道の安定確保が必須の課題だったようです。

柿生郷土史料館にとっては、本年が開館 14 年目にあたります。今年も地域の皆様と共に、歴史と文化を学びながら、着々と歩んでまいりたいと存じます。

本年も、皆様のご活躍をお祈りするとともに、素晴らしい年となりますよう、お祈り申し上げます。

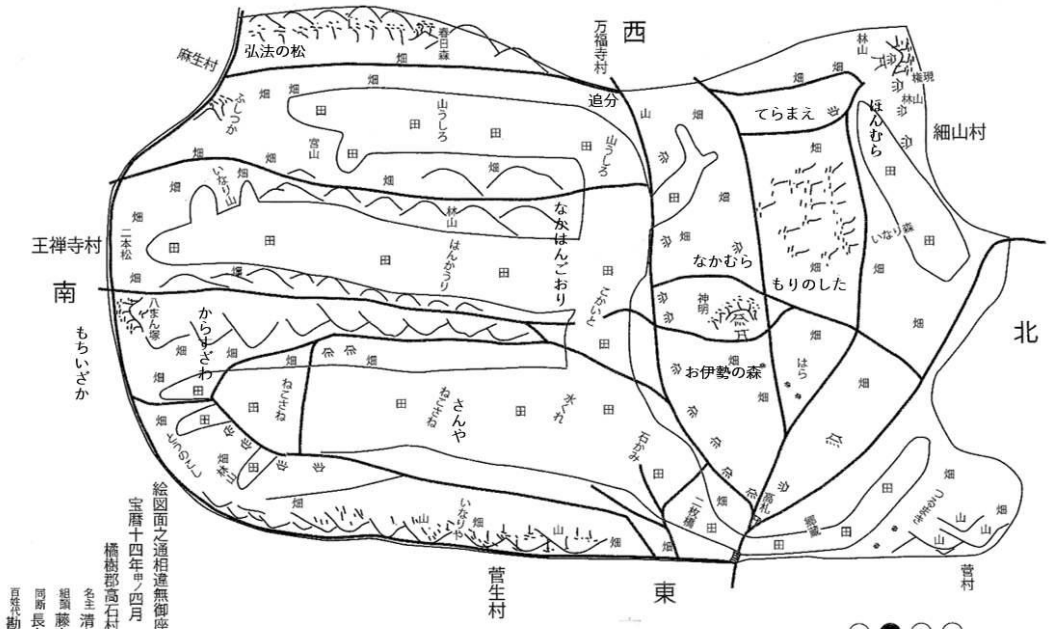
（参考　麻生郷土歴史年表　小島一也）

シリーズ
麻生区の地名　その 13

高石の地名と東百合丘

菊地恒雄(日本地名研究所 研究員)

高石村は橘樹郡に属し、明治 22 年には旧生田村と合併して、細山村や金程村と共に新しい生田村を構成しました。地名の由来はわかりませんが、タカシかタケシと呼ばれていたことにより、後に高石の漢字が当てられたのではといわれています。



宝暦 14 年(1764)の高石村絵図(池上家文書)のトレース図に加筆修正

現在は、高石村の西半分が百合丘という新地名になっており、高石の地形を想像するには無理がありますが、五反田川沿いから南に延びる谷戸はしばらくは緩い傾斜ですが、急に崖が目の前に迫ってきます。その崖を登りきると王禅寺や上麻生の村境に至ります。

一番奥の谷戸は山後(やまうしろ)で、百合丘 1 丁目と小田急線を挟んで高石 1 ・2 丁目付近です。津久井道はここの追分(おいわけ)で左手に行き、百合丘 2 丁目の百合丘小裏道から富士塚(ふじづか)を経て弘法の松へ、そこから、上麻生の長坂を経て万福寺に至ります。

二番目の谷戸は半郡(はんごおり)と中半郡(なかはんごおり)で、百合丘 1 ・ 3 丁目の一部で、王禅寺境に二本松があったことから、字二本松(にほんまつ)となり百合丘 3 丁目の地域です。半郡の意味はわかりませんが、評もコオリといい、土地の単位のことかも知れません。

三番目の谷戸は手前から水暮(みずくれ)、三谷(さんや)、猫実(ねこざね)で一番奥が烏沢(からすざわ)です。高石 4～6 丁目の地域です。水暮は意味はわかりませんが、水の便が悪く耕地への水やりに困ったという言い伝えがあります。烏沢は枯れ沢のことで、雨が降らないと水の流れが途絶えてしまうような地形を言います。三谷は各地にある山谷など開墾が最も遅かったところに付く地名です。猫実は狭い地域を指す形容と思われますが、根っ子という解釈をする場合もあり、崖下の土地という意味かも知れません。

北側の高石と細山の境に五反田川が流れ、高石 1～4 丁目があります。

高石神社のある付近は中村(なかむら)で村の中央部の地域です。高石神社は元は伊勢宮でこの辺を伊勢森(お伊勢の森)と呼んでいました。大正 11 年に村内の熊野社・八幡社・春日社・富士浅間社を合祀して高石神明社と称しました。お伊勢の森の下にあたる地域が森下(もりした・もりのした)です。

法雲寺や潮音寺のある付近を本村(ほんむら)、潮音寺の前を寺前(てらまえ)といいます。法雲寺は古くは真言宗でしたが、江戸期には臨済宗菅村寿福寺の末とあります。しかし明治入り無住となり、昭和 21 年に曹洞宗となって現在に至ります。潮音寺も古い寺でありましたが、無住で廃寺状態でしたが、江戸期に臨済宗菅村寿福寺末となりました。

西生田中学校の西側辺りを稲荷森(いなりもり)といいます。細山との境近くの雑木林でしたが、稲荷の小祠は潮音寺へ移されています。

西生田小学校の東側を弦巻(つるまき)といい、小名鶴巻も同地です。ツルは水流の意味で大きく曲流する地点をいい、この付近で五反田川が大きく曲流しています。

西生田中学校の東側辺りを石神(いしがみ)といい、字原(はら)には高札場がありました。ここに石神の社があったことによる地名です。明治 21 年に当地に「細王舎」という農機具製造工場があり、この工場で作られたミノル式脱穀機などが全国の農家で使われました。

高石の南境に東百合丘があります。高石の一部と生田・西長沢の字塔ノ越(とうのこし)・字餅井坂(もちいざか)にあたります。昭和 57 年に多摩区から麻生区が分区と同時に新町名ができました。

シリーズ
歴史の中の女性像

その1　ナイチンゲールの世界（5）

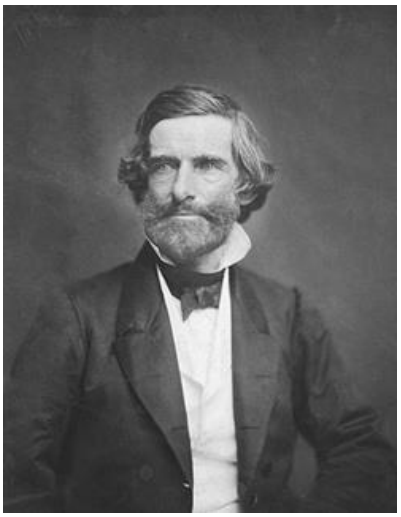
小林　基男（柿生郷土史料館専門委員）

看護の世界への歩み

フローレンス・ナイチンゲールが看護の仕事に就きたいと考えるようになったのは、いつ頃だったのでしょうか。この点ははっきりしません。ただ、彼女が「看護士の仕事がしたい」とはっきり口に出して、相談した人物が書き残した証言は残っています。米国の社会事業家として名高いサミュエル・ハウ博士です。博士は視覚障碍者の教育法を考案し、後にヘレン・ケラー女史も学ぶことになるパーキンス学院を創立した人物です。博士は、フローレンスの父ウィリアム氏の米国の友人の 1 人だったのです。ハウ博士は行動派の人物で、1820 年代はギリシアのオスマン帝国からの独立運動を支援し、30 年代に入ると、フランスの七月革命に刺激を受けて決起したポーランドの革命家を支援したりと、熱心に社会変革運動を支援していました。

フローレンスの父
ウィリアム・ナイチンゲール氏

そんな博士は、40 年代に入ると奴隷解放運動の協力者となり、運動に必要な資金の確保と支持拡大のために、国内ばかりか英国やフランスにもしばしば出かけるようになったのです。フローレンスの父ウィリアム氏は、行動派でありながら理性的で，視覚や聴覚の生涯に悩む人たちを親身に助けたり、奴隷という虐げられた弱者を助けたいというハウ博士の人柄を信頼し、英国における熱心な後援者の一人になっていたのです。博士もウィリアム氏を信頼し、英国に来ると必ずナイチンゲール家を訪問し、何日か滞在するのが常だったのです。


サミュエル・ハウ博士

フローレンスは、弱者にやさしいハウ博士を信頼し、障碍者が学べるパーキンス学院とその施設について、興味をもって質問するのが常でした。とりわけ盲人用に博士が開発したカリキュラムに強い関心を示していたのです。博士もそんなフローレンスを可愛がり、時間の許す限り優しく接していたのです。フローレンスが 24 歳になった 1844 年のことです。エンブリー荘に滞在していたハウ博士は、思いつめたような顔をしたフローレンスから、「私は病院で恵まれない人々のために働きたいのですが、それはとんでもないことなのでしょうか。」と相談されたことを書き残しています。「彼女の真剣な顔を見て、私も全力で答えました。」と博士は記します。「イギリスの上流階級では、それはとんでもないことだと考えられています。ですが私はあなたに進みなさいとお話します。そういう生き方を神様から与えられたと感じているのなら、それに従いなさい。あなたが恵まれない人々のために働くことは、とんでもないどころか立派なことです。私は神様があなたと共にいてくださることを祈ります。」

フローレンスが病院で働く意思をはっきりと表明して、人に相談した最初のケースでした。ハウ博士に背中を押してもらいながらも、なおフローレンスには迷いがありました。博士も指摘したように、英国の上流階級の間では、病院で働くなどとんでもないと考えられていることは、彼女も理解していたからです。両親や姉にどう話したら分かってもらえるか、答えが出せなかったのです。1 年が過ぎた 1845 年、フローレンスの親しい友人マリアンヌの兄、ヘンリー・ニコルソンが彼女に結婚を申し込んできたのです。ヘンリーは両親も姉も認めた申し分のない結婚相手でした。妹のマリアンヌもフローレンスが当然承諾するものと大喜びでしていたのです。しかし、彼女は両親から強く勧められたにも関わらずこの縁談を断ってしまったのです。フローレンスが書き残した「私だけのメモ」があるのですが、そこには「ヘンリーと結婚すれば私は広いお屋敷に住み、大勢の召使いに囲まれ、なに不自由なく暮らせるだろう。ヘンリーは教養も高く人柄も良いから、私たちの結婚生活は素晴らしいものになるだろう。けれど、私が心の秘密としている道に進むためには、ヘンリーと結婚するわけにはいかない。」と記されています。悩んだ末に彼女が出した結論でした。いぶかる両親にフローレンスが、「病院で患者の世話をする仕事がしたい」と切り出したのは、彼女が 25 歳で迎えた 1845 年の年の瀬でした。話を聞いて唖然とした家族の猛反対は、フローレンスの想定を大きく超える激しいものでした。

続く

柿生地域の公民館新聞を探しています

東柿生公民館新聞

「東柿生公民館新聞」の第 2 号だけ手元にあります。B 4 版のわら半紙両面にきれいにガリ版刷りされた手作りの新聞です。昭和 25 年（1950 年 7 月 15 日）発行、発行主体は東柿生公民館文化部となっています。公民館は昭和 24 年(1949 年)6 月に施行された社会教育法に基づき各地に誕生しています。東柿生公民館も、同法に基づき設置された公民館の一つです。

東柿生公民館が包摂する地域は、旧柿生村の内、早野、王禅寺、下麻生、真福寺の 4 地域。1 面記事は、おそらく当時の館長や編集子の姿勢に基づくのでしょう。格調高い教育論が全面を飾り、2 面は住民に伝えたい多くの雑報で占められています。2 面記事の一つに、地域の人口統計がありました。4 地域それぞれの世帯数と人口は、早野 72 世帯、432 人、王禅寺 97 世帯、583 人、下麻生 59 世帯、357 人、真福寺 44 世帯、290 人、合計 272 世帯、1,662 人と記されています。ちなみに 70 歳以上の老齢者（高齢者と言わず、老齢者と称していたのですね）は男性 26 人、女性 35 人の 61 人でした。全人口に占める割合は 4%弱。多くの若い命が失われた悲惨な戦争の影響がまだ色濃く残っていた上に、電化製品といえばラジオと蓄音器が一部の家庭に備えられていただけの、働きづめの厳しい暮らしの中で、長く生きることがまだ難しい時代であったことが読み取れます。

昭和 25 年の日本は、なお GHQ の占領下にありました。戦前に存在した各地の部落会は、戦争に加担した組織として、隣組と共に GHQ に解散を命じられて、一時的に消滅し、公民館が部落会の機能を代替えすることになり、青年団と共に地域の要の役割を果たすべく活動したのです。しかし、部落会が担った行政補助機能を担当する組織はなく、昭和 23 年（1948 年）12 月になって広報委員会の設置が推進されることになったのです。ここに川崎市内に 28 の広報委員会が設立されたのですが、市内全域を網羅するには十分とは言えず、東柿生公民館のように、しびれを切らして自ら広報紙として新聞を発行する公民館も登場したのです。

旧柿生村 10 か村の範囲を取れば、東柿生、上麻生の 2 公民館をはじめ、いくつかの公民館が誕生したものと思われますが、川崎市教育委員会社会教育推進課が編纂した平成 30 年・31 年度（2018～19 年度）の『川崎市社会教育推進会議 研究報告書』を見ても、資料として掲示された市民館の歴史にも、昭和 24 年誕生の川崎公民館と 26 年誕生の稲田公民館のみが記載され、諸他の公民館の存在は記載されておりません。理由は不明ですが、地元の大切な記録が闇に葬られるのは、なんとか避けたいですから、史料館として地域の公民館が部落会や町内会に代わって果たしていた役割を可能な限り明らかにする活動を心がけてゆきたいと考えています。

つきましては、当時の公民館並びにその他の機関が発行したガリ版刷りなどの記録が残っておりましたら、是非史料館に寄贈していただきたく、お願いいたします。大切に保存し、当時の地域社会の復元に活用させていただきます。

探しています　『東柿生公民館新聞』、柿生同人会発行の『KAKIOSHIMBON』その他柿生地域に関する記録や資料の類がございましたら、柿生郷土史料館にご寄贈ください。地域の昭和時代の記録の復元に欠かせない大切な資料です。よろしくお願いします。

柿生郷土史料館催物案内　【参加自由、入場無料】

◎開館日：1月7・14・21・28日（毎日曜日）　2月10・17・24日（毎土曜日）
◎開館時間：午前10時～午後3時

第 90 回 カルチャーセミナー　川崎市北部の鉄道史～昭和期の宅地開発を中心に～

日時：2023 年 1 月 21 日（日）13 時 30 分～15 時 30 分
講師：中川 洋氏（法政大学文学部兼任講師）
会場：柿生郷土史料館特別展示室

鉄道関連を中心に、川崎の産業遺跡の研究を続けられている中川洋先生をお迎えして、小田急沿線を中心に、鉄道が川崎市北部の景観をどのように変えてきたかを、小田急本線と新百合ヶ丘を起点とする小田急多摩線沿線の宅地開発と絡めてお話しいただきます。

開業時の新百合ヶ丘駅周辺。左上の弓なりの部分に旧線があった
（小田急電鉄広報課『コミュニケート小田急』No.40.〔部分〕）